近世二條家の屋敷について

－近世公家住宅の復古に関する研究 1－

ON THE RESIDENCE OF NIJO-FAMILY AT THE EARLY MODERN PERIOD
－ A study of the Heian revivalistic style of the court-noble's residence at the early modern period Part 1－

藤田 勝也*
Masaya FUJITA

The purpose of this study is to clarify the realities of Heian revivalistic style of the court-noble's residence at the early modern period. In this paper, the residences of the Nijo-family especially were taken up and the history of the residences at the early modern period was confirmed. The shinden existed in the Shin-zaike-cho residence, the Imadegawa residence before conflagration at Tenmei, and Imadegawa residence after conflagration at Tenmei, and all these shinden had the Heian revivalistic style. As a result the construction of the shinden having the Heian revivalistic style was a running tradition in the residence of the Nijo-family at not the one limited after the conflagration Tenmei but the early modern period.

Keywords : *Nijo-family Early modern period, Shinden, Heian revivalistic style*

二條家, 近世, 寝殿, 復古様式

1. はじめに

本研究の目的は、近世公家住宅における復古の実態解明にある。本稿ではとくに二條家屋敷を取り上げる。二條家屋敷における寝殿の建築の実態を通史的に概観することによって、近世摂家における復古のあり方を瞥見したい。

近世公家社会の家格の頂点にあった五摂家のひとつ、九條家では、寝殿一郭における復古的な形式は少なくとも17世紀前半にまで遡る可能性があり、江戸時代を通じて一貫してみられる「伝統」であった¹⁾。しかし一方、小沢朝江によれば、摂家において復古の兆候は寛政以前からみえることを確認しつつ、寛政度の内裏が平安復古で造営されたように、「公家邸宅の「平安復古」は天明の大火後に「生まれた」ものという²⁾。清水重敦もまた、光格天皇による寛政度内裏の復古造営以降、「朝廷および公家社会において復古ブームが巻き起こった」と評し、小沢の主張をうけて、「公家住宅が復古的に造られ」たとし、この時期の復古をとくに強調する³⁾。かつて平井聖が、摂家寝殿の沿革を概観する中で、近世の「末期に入ると禁裏・仙洞御所に見られる様式復古の風潮は摂家住宅の寝殿にも及ぶ」と論じたのも、天明大火後の再建寝殿に関するものであった⁴⁾。

このように天明の大火後、摂家における寝殿再建の際、内裏の復古造営を背景に復古の形式がとくに意識され、具体化したとされる。もしそうなら、復古の伝統が近世を通じて一貫して確認できる九條家というのは、五摂家の中でも特異な存在なのか。あるいは、各家の間に、復古への指向に温度差は抑もなかったのか。小沢が取り上げた摂家とは、一條、近衛、鷹司の各家であり、九條家を補助的に

援用し、他に桂宮家に言及したものである。つまり五摂家のうち、考察対象はおもに三家であった。近世摂家における復古の実態について、詳細な検証があらためて必要である。そこでまず本稿では、五摂家のひとつであるにも拘わらず、上記の既往研究ではほとんど取り上げられていない二條家をめぐって、復古の実態を明らかにしたい⁵⁾。

2. 近世二條家屋敷の沿革

二條家屋敷のとくに中世から近世における沿革に関しては、すでに川上貢が鎌倉時代に遡って明確に跡づけている⁶⁾。まずはこれに依りつつ概観しておく。

二條家は、鎌倉時代以降、押小路南・室町東の押小路殿を本邸とした。しかし天正4年(1576)、織田信長によって、信長自身が用意した報恩寺屋敷に強制移転させられる。この屋敷は内裏東北方、後陽成院御所の東隣にあたる地であった。慶長12年(1607)には内裏拡張に関連して新上東門院御所造営のため屋敷替えさせられるという計画もあったが⁷⁾、この時は実現していない。しかし報恩寺屋敷への移転から35年後の慶長16年(1611)、内裏改造にともなって後水尾天皇が新上東門院御所を仮内裏としたことから、新上東門院のための新御所が必要となり、その敷地に二條家の報恩寺屋敷が先の計画通りあてられることになった。そこで二條家には、新内裏南方東寄りの新在家町に、報恩寺屋敷の代替地が与えられた。この時の状況は、『中むかし公家町之絵図』（慶長16年<1611>～元和元年<1615>頃成立、京都府立総合資料館蔵）に、もとの二條家の報

* 関西大学環境都市工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Environmental and Urban Engineering, Kansai Univ., Dr. Eng.

恩寺屋敷の地は「女院様」、新在家町邸の地には「二条殿」と記されるところである。なおその過程で、新上東門院御所の旧御殿にあった四足門が二條昭実に下賜されている⁸⁾。二條家が新造の新在家町邸に移徙したのは慶長 16 年 12 月で⁹⁾、この邸は万治 4 年(1661)正月の火災まで継続する。万治の火災は二條家が出火元であった¹⁰⁾。この火災の後、新在家町邸は後西天皇譲位後の御所の一部にあてられることになって、二條家は今出川通の北、東福門院下屋敷跡に替地が与えられる。それが今出川邸である。同邸は、天明の大火(天明 8 年<1788>)で焼失する。しかし同地において再建されており、その後、嘉永 7 年(1854)4 月の内裏炎上では、類焼地域の北限が今出川通で、二條家は被害を免れる。さらに元治元年(1864)7 月、蛤御門の変を契機とする大火災(鉄砲焼け)が発生し、下京を中心に焼き尽くされたが、類焼地域が中立売より南方であったため、この時も火災を免れ、今出川邸は幕末から明治へとさらに存続する。このように天明の大火以前は 100 年以上にわたって、また火災後の再建でも 100 年近くにわたって今出川邸は二條家屋敷として継続使用されたのであった。

以上、二條家屋敷の近世における沿革は、次のように整理できる。

報恩寺屋敷：天正 4 年(1576)～慶長 16 年(1611)移転

新在家町邸：慶長 16 年(1611)～万治 4 年(1661)焼失

今出川邸①：万治 4 年以後～天明 8 年(1788)焼失

今出川邸②：天明 8 年焼失以後再建～

報恩寺屋敷については建築に関する史料を管見に見出せない。以下では新在家町邸および今出川邸①②について検討することとする。

3. 新在家町邸

慶長 16 年(1611)の屋敷割り当て時の図によって、邸の位置および、およその規模が判明する¹¹⁾。また先述した通り、『中むかし公家町之絵図』に記される「二条殿」の規模は東西 51 間、南北 73 間で、矩形に描かれる。内裏の南を限る新道をはさんで南隣にあって、東もまた内裏の東を限る南北の道に面する。

敷地内の建物の全容は明らかでない。しかし『道房公記』寛永 13 年(1636)正月 2 日条(宮内庁書陵部蔵)に記される摂政家拝礼の関連記事ならびに指図(図 1)によって、寢殿の存在は確認でき、さらにその一郭の構成が概観できる。当時の二條家の当主康道は九条幸家の息であり、記主九条道房の兄にあたる。道房は兄の二條邸にこの頃頻繁に出入りしている¹²⁾。摂政家拝礼が当日あって、摂政康道の新在家町邸が会場にあてられたのである。

図 1 の左手に「東」とある通り、寢殿は北面し、寢殿の西にあって北伸する廊は中門廊である。寢殿と中門廊を連絡する南北 2 つの廊があり、壺庭を形成する。北側の廊は、当日条から透渡殿であることがわかる。中門廊の西面から卯酉棟の侍廊が西方へ接続し、侍廊の北方には目隠し塀がたつ。中門廊に「公卿間」、その西側につながる侍廊は「蔵人所」にあてられている。中門廊の北先端、西面に車寄を備え、中門に至る。中門の北方は廊ではなく塀が伸びていたようにもみえる。四足門が中門の北西方に北面してたつ。この四足門の位置から、東西一町に満たない新在家町邸において、これら寢殿一郭は、北隣の内裏と向き合う敷地西北部を占めたのではないかと推察される。

寢殿正面に木階があって、両側の柱 2 本は階隠を示唆する。それ

図 1 新在家町邸の寢殿(『道房公記』寛永 13 年正月 2 日条所収)

が桁行中央間とすると、寢殿の正面柱間は 7 間かと推察される。寢殿の間取りは判然としないが、正面(北面)および西面に 2 間幅の底がまわるように描かれていて、いわゆる母屋・底からなる平面がうかがえる。建物の配置構成に加え、平面においても、寢殿一郭には復古的な様態が看取されるのである。当日条には、公卿の所作に「建久二年内大臣兼房公」(兼房は九條兼実の同母弟)の前例を踏まえたことが記されている。

なお、寢殿一郭の構成が、同時期の九條家のそれとときわめて近似することも看過できない¹³⁾。九條家の寢殿もまた北向きである。ただ、寢殿に付属する透渡殿・中門廊・侍廊などの諸施設が寢殿の東側にあって、二條家のそれとは正反対ではある。つまり両者の構成は、いわゆる鏡像関係にある。寢殿のかかる類似性については、当時の二條家当主が九條家出身であったことがとりあえず想起されるのだが、詳細は現時点で明らかでない。

4. 今出川邸

本節では、今出川邸の建築の実態について、天明の大火以前と以後にわけて検討する。

4-1. 天明大火以前(今出川邸①)

九条兼晴の次男で、二條光平の養子となった二條綱平の元服式が、天和 2 年(1682)11 月に今出川邸で執り行われている。『二條綱平元服次第並指図』(宮内庁書陵部蔵)は、その儀式次第を記すとともに、会場の略指図を収める(図 2)。図中に「二条殿寢殿元服之御指図」とある通り、会場にあてられたのは寢殿である。記事ならびに図 2 によれば、寢殿は南面し、東西 3 列南北 2 列の都合 6 室の空間に仕切る。南面に縁があり、中央に階段を備える。元服会場は中央列の南北 2 室で、主会場となった階段正面の室には、その東北位置に加冠座、西南位置に公卿座が設けられ、また北隣の室は冠者曹司所にあてられている。

また明和 6 年(1769)12 月には、二條治孝の元服式が開催された。このときの儀式次第は『二條治孝元服次第 附、図』(宮内庁書陵部蔵)に記され、会場指図を収める(図 3)。図 3 では会場となったのが寢殿だけでなく、その右方(東方)一郭も含まれることがわ

図2 今出川邸(天明大火以前)の寝殿(『二條綱平元服次第並指図』)

図3 今出川邸(天明大火以前)の寝殿
(『二條治孝元服次第 附、図』)

かる。すなわち、寝殿は正面5間で、中央に階段を設ける。東面南端間は妻戸を装置し、南から2間目に東西柱列がある。寝殿の東に梁間2間の卯西廊が接続し、梁間1間で南北棟の中門廊に至る。中門廊からさらに東に柱列があるのは、卯西廊の侍廊であろうか。中門廊の南端に落板(沓脱)らしき線が描かれる。また東面に妻戸を装置し階三級があるのは、車寄であろう。中門廊の外周に縁がまわる。中門廊の南に中門が開く。中門の南は廊ではなく塀で区切られる。さらに寝殿南庭の東に梅、西に橘が植えられていて、古式への拘りが植栽にも及んでいたことがうかがえる。これは九條家屋敷では近世初期に遡ってみられるところである。

図2、図3を見比べてわかるとおり、綱平と治孝の元服会場にあてられた上記寝殿のあり方には相違する点が少なくない。約90年近い時間経過の中で、寝殿に少なからず改造があった可能性もある。正徳2年(1712)、綱平の息吉忠と加賀前田家5代藩主綱紀の女前田直(栄君)の婚儀に際して、前田家の援助のもと、綱平によって御

殿群が敷地東方に造営されている。その時の諸建物は、指図によって確認できる¹⁴⁾。対して、西半の一部を占めたと考えられる寝殿一郭の改修の有無は定かでない。とまれ、ここでは寝殿が継続的に存在したらしいこと、元服という伝統的な儀式が寝殿で挙行されていたこと、そしてまた、とくに図3に描かれるように、寝殿一郭の建物構成に復古の形式が強く意図されていたことに留意したい。向きは異なるとはいえ、先にみた新在家町邸のそれ(図1)と、寝殿正面向かって右手に諸建物を接続するという構成において近似することも指摘できる。

なお、寛文13年(1673)5月、東福門院御所が焼失し、東福門院は明正院とともに「二條前摂政家」(光平邸)に避難、女院はしばらくここを仮御所とした¹⁵⁾。延宝4年(1676)12月の、後水尾院・東福門院御所全焼の際、東福門院は「女五宮御殿」へ御幸して仮御所とし、翌年10月までここに居住した¹⁶⁾。女五宮とは二條綱平母の賀子内親王(後水尾院皇女)であり、その屋敷が二條光平の今出川邸の東半を占めたことは、『新改内裏之図』(延宝5年)に確認できる。また宝永5年(1708)3月の、霊元院御所・新西門院御所焼失の際には、新西門院(霊元院皇后)が「二條殿」すなわち綱平の今出川邸に一時避難している¹⁷⁾。しかし、上記いずれも、その時の屋敷の詳細は明らかでない。

4-2. 天明大火以後(今出川邸②)

二條家の今出川邸全体の配置構成を示す図が、宮内庁書陵部に蔵される『中井家文書』中に見いだせる¹⁸⁾。『二條家拜領地図面』(図4)と呼称されるもので、裏書に「二條家」の墨書、図右上方には、「拜領地／二條家／所 今出川通京極殿北ノ町／坪数凡六千九百四十四坪餘／但一坪ヲ曲尺ニテ凡五分四方ノ割」(／は筆者による。改行を示す。)の記載がある。東西南北の四面には、貼紙によって隣地あるいは路の名称を記すとともに、敷地の内外を画する塀の長さを間数で示す。敷地内建物の状況を墨書の単線で示す配置図である。同図に年記はないが、南西部の一郭を朱線で区切り、「朱引ヨリ南／大学校御用」と朱書されるのが留意される。それは、明治初頭の京都における学校設立に関連する。

すなわち、慶応4年(1868)3月、大政復古の政変など政治的混乱により一時閉鎖されていた京都の公家学校「学習院」が復興し、翌4月には公家勢力によって大学寮代と改称する。改元後の9月には、国学中心の皇学所、大学寮代の流れをくむ漢学中心の漢学所が設置されて2校体制となる。漢学所は梶井宮家の邸においてすぐ開講されたが、皇学所は当初九條家に予定されていたところ、二條家の今出川邸に変更となり、開講されたのは12月であった。しかし翌2年3月の東京奠都により、皇・漢両学所は同年9月に廃止される。さらに同年12月には留守官の権限により、それらを合併した「大学校」が二條家において再開される。しかし政府は、翌3年8月に大学校(京都大学校)廃止の通達を出し、京都における大学創設の計画は結局頓挫する¹⁹⁾。ちなみにその後京都帝国大学が設置されたのは、明治30年(1897)であった。

ごく短期間とはいえ、二條家は上記の如く皇学所、大学校といった教育機関にあてられることがあった。図4において「大学校御用」として朱線で示されるのは、この大学校にあてられることになった時に、用いられた邸内の範囲を示すものであり、同図は明治初頭頃における今出川邸の全体を描写したものであることになる。

図4 今出川邸（天明大火以後）の全体図（『二條家拝領地図面』）

図5 今出川邸（天明大火後）の寢殿（『住宅（御殿）指図』）

さて、遡って天明の大火以前の今出川邸では、前記した通り、正徳2年(1712)に御殿群が敷地東方に造営された。しかし図4をみると、この御殿群の位置に相当する敷地東半部は大方が「畠」あるいは「庭」と記されていて、建物は周辺に点在するに過ぎない。天明の大火後に再建された二條家屋敷では、当主が居住するいわゆる表方御殿群が敷地西半に偏在する状況にあった。寢殿はそれら御殿群

の南方部を占め、寢殿西側に接続する廊、門、塀のあり方から、この一郭は御殿群の中でもきわめて復古的な景観を呈していたことがわかる²⁰⁾。

この時期の、とくに寢殿一郭の建築的様相については、注目すべき指図が木子文庫に存する。『東京都立中央図書館蔵 木子文庫蔵書目録 第一巻』（東京都立中央図書館、1998年）に『住宅（御殿）指図』（請求記号：木038-5-24）と仮題される図1点（図5）である。同史料は無題で、邸名についての記載がない。また言うまでもなく、上記の仮題からは描かれた邸を特定できない。しかし、敷地南面および西面の状況、そして中心的に描かれる寢殿の一郭は、先の『二條家拝領地図面』（図4）の、同じ寢殿一郭にあたる西南部の状況とよく一致する。すなわち、ともに上方を北に描く両図において、寢殿の南方、敷地南面に沿って横長矩形の一面があり、その西面に門らしき描写がある。この区画を図4では「鎮守社」と記す。また、その西方には塀を北に折り曲げて南面して門を開く。図5では「四ツ脚門」とある。そしてさらに敷地西面の南方角に門を設ける。図5では「表門」と記される。このような敷地周縁部の状況に加えて、図5では寢殿およびその西方、北方に連なる建物がやや詳細に描かれるが、これもまた図4が該当する位置に描く建物の輪郭線とよく一致する。

『住宅（御殿）指図』（図5）が二條家の今出川邸、その西半のとくに南方、寢殿を中心とする一郭を描いたものであることは、以上のことから間違いない。

同図には年紀も無い。先述の『東京都立中央図書館蔵 木子文庫蔵書目録 第一巻』によれば、袋表題に「傳家 雑」とある、内裏や仙洞御所の図面類、計29点の内の一つであって、帙表題は「木子清秀一」である。清秀は天保3年(1832)木子家当主をつとめていたから、この頃の二條家今出川邸の状況を描いたものと、まずは考えられる。

さらに留意されるのは、図の朱線、朱字である。それらは若干の増改築、用途の転用を示唆する。朱字による室名は、「講堂」「律令局」「辞章局」「雑史局」「史学局」「神典局」「講官休所」「御用掛候所」「句読師休所」「素読所」などである。それら呼称から想起されるのは、前記したとおり、二條家が教育機関として活用されていたことである。図5はそのときの状況をさらに具体的に示すものであって、また同時にそれは、図5が二條家今出川邸を描いた図に間違

いないことを裏打ちする。

朱書による室名をみると、「講堂」や「局」が教室にあたる所で、寢殿南半が割り当てられ、講官、句読師といった教員、あるいは教員・事務員にあたる「御用掛」の控室には、北半あるいは西北の二棟廊があてられている。学校諸室に割り当てられたのが寢殿一郭の建物群であった、そのこと自体興味深い事実であるが²¹⁾、図5は、学校への用途転用を示す明治初頭の朱による補筆を受けたものと見なされるのである。

さて、寢殿の一郭が復古的な景観を呈していたことは、図5によって、より明確になる。寢殿は周囲に縁をまわし、寢殿西側は、南に透渡殿、北には二棟廊に相当する廊があて南北廊に接続する。この南北廊は中門（北）廊に相当する。侍廊に相当する東西方向の建物がこの南北廊の西に接続する。この廊の南には目隠し塀を備える。南北廊の南に中門がある。中門の南は塀がたち、敷地南を画する塀に至る。また中門の外側、南面して敷地の内外を分ける四足門がたつ。寢殿に接続する諸建物は寢殿西方に位置していて、西方からのアプローチを想定した組み立てになっているのは、天明大火以前の今出川邸が東方に展開したのと正反対である。しかしいずれにせよ、このような全体の配置構成は、平安時代の公家住宅に通じるものである。

寢殿の空間構成はどうか。寢殿は東西、南北とも7間で、東西に東から2間、3間、2間の計3列、南北に南から2間、2間、1間、2間の計4列に間仕切り、都合12室をつくる。縁、高欄を廻し、正面に階段、背面にも登り口の階段がある。縁は西方建物も含め縁縁であるが、寢殿の南面、西面および東面の南側は切目縁としている。

母屋・庇という復古的な空間構成をかかえる間取りからうかがうことは可能である。しかし、たとえば中央の室を「二拾五帖」と墨書するように、各室を規模（帖数）によって示す、その表現のあり方には、復古の指向性は希薄である。

これに関して参考になる史料の一つに、『二條家婚儀記』（国立国会図書館蔵）がある。文化8年（1811）5月、二條斉信と徳川従子（水戸藩主徳川治紀の娘）の婚儀が二條家屋敷の寢殿を会場に開催された時の儀式次第を記すもので、会場の指図（図6）を収める。図6に「御婚礼御礼寢殿北廂図」とある通り、主会場にあてられたのは寢殿の北面および西方の廊である。主会場は図5で「二拾五帖」と記す北面中央間と考えられるが、ここでは「北廂」と記し、さらにその南は「寢殿母屋」と明示する。母屋・庇空間が意識されていることがわかる。また西に繋がる東西の廊（寢殿西北廊）は図5では「二拾五帖」とあるが、図6では「二棟」と記し、二棟廊に相当することも明示している。また二棟廊南の「中庭」の西にたつ廊には「公卿座」と記されている。

『二條齋敬元服理髪以下之事』（宮内庁書寮部蔵）もまた同様の史料である。文政7年（1824）5月、寢殿を会場に開催された二條齋敬元服の式次第を記すもので、会場の様子を描く指図が収められている（図7）。図5では「二拾五帖」とあった中央の室を「母屋」、母屋東側、西側の室は、間仕切りを取り払って各々「東庇」「西庇」と記す。そして加冠座の置かれた中央列で南庭に面する室は、図5ではやはり「二拾五帖」とある室であったが、図7では「南庇」である。さらに、「西庇」の西面南端から東西にのびる廊を「透渡殿」、その西につながる南北廊を「中門廊」とし、その北側を「客亭」と

記す。そこは図6でも「公卿座」と記されていた所である。また図7では「客亭」の東につながる廊について、記事中に「二棟廊」とみえる。このように図7では、寢殿の母屋・庇空間がとくに寢殿南面において示される。加えて、寢殿西方の建物群において平安時代公

図6 今出川邸（天明大火以後）の寢殿婚儀会場（『二條家婚儀記』）

図7 今出川邸（天明大火以後）の寢殿元服会場（『二條齋敬元服理髪以下之事』）

図8 今出川邸（天明大火以後）の寢殿西方（『二條家日記抄』文久2年12月5日条）

家住宅の建物名・室名が意識されていたこともまた明瞭に示されるのである。

さらに『二條家日記抄』(宮内庁書陵部蔵)には、とくに寢殿西方の建物構成に復古の伝統が顕著に示される図が収められる。文久2年(1862)正月4日の内大臣斉敬が右大臣に遷任した時の拝賀着陣次第、同じく斉敬による同年12月5日の隨身兵仗拝賀陣次第を記す各条に、「寢殿以下鋪設之図」と題して描かれる指図である。両者ともほぼ同じ描写内容をもつため、本稿ではやや詳細な後者の図を掲げる(図8)。図6で「二棟」とある所は同じく「二棟」であり「内出居 御座」が置かれ、図6、図7で「公卿座」「客亭」とある所は同じく「公卿座」、南の中門廊には「殿上人座」が設けられている。公卿座の西方に連なる廊について、図5では東側の東西2間分を南北に仕切って「七帖半」の2室、その西隣の東西3間分を「十八帖」の1室に間仕切っていた。図8では南の「七帖半」が「障子上」である。図7では「床子上座」と記されていたところである。そして図5の「十八帖」は、図8では「侍所」と記される。中門廊の南端西面の唐破風は車寄であろう。また中門の外側(西側)南方に「隨身所代幔」「車宿代幔」がある。各々、隨身所、車宿を仮設したものである²²⁾。

図5では縦横の間仕切りによって均質な室をただ羅列したに過ぎないようにも見える。しかし以上のように、儀式時には母屋・庇からなる伝統的な空間として機能し、さらに寢殿西方の建物構成にも復古の形式が意図されていたことが確認できるのである。

なお、蛇足ながら、明治にはいっても大学校にあてられるなどして存続した今出川邸の、その後の沿革について最後に触れておく。当該地は同志社英学校の東にあたり、同志社女学校が用地とすべく、材木商堀本利慶の名義によって明治10年(1877)11月に買収し、翌年7月には女学校校舎が竣工している²³⁾。同校舎は現同志社女子大学の静和館の位置にあたる。校舎建設後もなおその東方には二條家の建物が存在したことは、当時の写真から確認できる²⁴⁾。明治11年(1878)秋に女性旅行家イザベラ・バードが京都滞在に用いた宿泊施設が、同志社女学校である。旅行記に「二条さん屋敷」と記され、「塀に囲まれたある公家屋敷の広い敷地」にその施設はたっていたという²⁵⁾。女学校が二條家屋敷地内にたてられて後も、二條家の殿舎群が併存し、また屋敷地すべてが女学校に買得されたわけではないことを示唆するものであろう²⁶⁾。

5. おわりに

近世二條家の屋敷における復古の実態を、とくに寢殿をめぐる概観した。寢殿の平面および、寢殿を中心とする諸建物の構成に限定された検討であるが、そのいずれにも復古への指向性は強くあらわれていた。しかも、16世紀後半の報恩寺屋敷については不明ながら、以後の新在家町邸、今出川邸、さらに天明大火後に再建、明治維新を迎えた今出川邸という、いわゆる近世における二條家の屋敷では、一貫して復古の意図が明確に確認された。復古をより具体的に示す史料が今出川邸の天明大火後にやや偏在する、ということはある。しかしながらそれは管見の史料的制約によるものともいえ、平面あるいは配置構成に関する限り、復古形式が天明大火後になってとくに意識され、実現されたというわけでもなかったらしい。

18世紀前半、二條家当主をつとめた宗基は、天明大火以前の今出

川邸に居住した。その宗基は、『寢殿図一件二付二條宗基奏上』(宮内庁書陵部蔵、自筆本)を残している。そこに描かれるのは、『山槐記』治承2年(1178)11月12日条から引用された六波羅泉殿(ただし史料では「池殿 寢殿図」と記す)、『園太暦』康永3年(1344)3月26日条の「光厳院寢殿図」である。近世摂家の心性に宿る寢殿への拘りがそこに垣間みえる。二條家屋敷における復古的な寢殿の、継続的な存立は、このような強固な伝統に裏付けられたものだったのではないか。復古への指向、その具体化は、復古造営が寛政度以下がる内裏より、二條家の方が先行していた、ともいえる。そして、あるいはそれは中世に遡る可能性さえある。寛政年間において公家屋敷に復古を意識した寢殿が新造されたことをめぐって、当時の復古の風潮、内裏の復古造営からの影響を特段に強調する見方には、少なくとも二條家については再考の余地があろう。

それでは、近世摂家の中で、二條家が復古を一貫して指向し、実現したのは何故か。あるいはまた、冒頭に記した通り、九條家でも同様に確認されるのだが²⁷⁾、はたして、17世紀前半における二條家と九條家の寢殿一郭は近似していた。近世を通じての復古への強い想いは、摂家の中でもとくに両家にのみ特異な傾向なのか。もしそうなら、それは一体如何なる理由によるのか。それら課題については、他の摂家について今後あらためて検証する中で、明らかにしたいと考える²⁸⁾。

注

- 1) 拙稿「『寢殿図』成立の経緯―裏松固禪『院宮及私第図』に関する研究 3―」『日本建築学会計画系論文集』603号、2006年(後に藤田勝也編『裏松固禪「院宮及私第図」の研究』中央公論美術出版、2007年所収)。
- 2) 小沢朝江「『復古』という流行―寛政期の公家邸宅造営と復古内裏の影響―」(西和夫編『建築史の回り舞台』彰国社、1999年)。なお、摂家寢殿から対面機能が分離し、儀式・行事の空間として確立するのが「江戸時代初期末頃」(寛文・延宝)であるという小沢の指摘は、平井聖「江戸時代摂家住宅に於ける『寢殿』について」(『日本建築学会関東支部第20回研究発表会』、1956年)においてなされている。
- 3) 清水重敦「建築における過去―日本近世―近代における継承と転換の位相」(『シリーズ都市・建築・歴史 7 近代とは何か』東京大学出版会、2005年)。
- 4) 平井聖「近世に於ける摂家住宅の寢殿について」『日本建築学会論文報告集』第63号、1959年。
- 5) 註4 前掲平井論文では明治年間という指図の一部(後述)を挙げるにとどまる。「公家邸宅」が考察対象という、註2 前掲小沢論文では、二條家について触れるところがない。またその理由は明示されない。ほかに北野隆「近世公家住宅における数寄屋風書院について―その2 摂家住宅について―」『日本建築学会論文報告集』275号、1979年が、近世摂家の寢殿を取り上げているが、二條家はみえない。
- 6) 川上貢「摂関家二條家の押小路殿と報恩寺屋敷」『京都府埋蔵文化財論集 第4集』京都府埋蔵文化財調査研究センター、2001年。
- 7) 『義演准后日記』慶長12年(1607)12月24日条、『孝亮宿禰日記』同年12月22、23日条。
- 8) 『義演准后日記』慶長16年(1611)5月25日条。
- 9) 『孝亮宿禰日記』慶長16年(1611)12月26日条。
- 10) 『隔冥記』万治4年(1661)正月15日条。
- 11) 『二條邸敷地絵図』(宮内庁書陵部蔵、『中井家文書の研究 第九巻』中央公論美術出版、1984年所収)。
- 12) 『道房公記』寛永12年9月5日、同13年正月2日、同14年正月2日、同20年正月7日、同21年12月18日の各条など。
- 13) 前掲註1 拙稿。『道房公記』正保4年(1674)正月5日条所収指図。
- 14) 近藤磐雄編『加賀松雲公 上巻』羽野知顕、1909年に所載の『二條家新築図』(侯爵前田家所蔵)および、『二條殿御簾中榮君御方御家指図写』(正徳6年写、中井家文書、京都府立総合資料館蔵)。またこの作事に関して、加越能文庫(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵)に、『二條様御殿地御代

形平均井土堀仮小屋仮垣等御入用帳』『二條様御普請一件留』『二條様御作事惣御入用一紙帳』などがあり、『二條様御作事惣御入用一紙帳』では造営のとくに調達材料に関して詳細が知られる。

- 15) 『中井家文書の研究 第三・四巻』中央公論美術出版、1978・1979 年。
- 16) 『中井家文書の研究 第四巻』中央公論美術出版、1979 年。
- 17) 『中井家文書の研究、第六巻』中央公論美術出版、1981 年。
- 18) 宮内庁書陵部蔵の内匠寮本の一つであるが、同史料を影印・解説した『中井家文書の研究』全 10 巻（中央公論美術出版、1976～1984 年）には未掲載である。
- 19) 明治維新直後の学校設立の経緯に関して、『明治維新と教育 大久保利謙歴史著作集 4』吉川弘文館、2007 年を参照。なお、皇学所に転用する際の検分によると、二條家屋敷の寝殿は「荒唐甚」という状況であった。『太政類典第一編』・『公文録』（内閣文庫蔵）によると、明治 3 年 3 月には句讀生増加を理由に大学校から二條家に対し建物借増の申請が出されている。また同年 9 月には、大学校廃止によって、二條家に建物は返還され、金百円が下賜されている。
- 20) 平井註 4 前掲論文「近世に於ける摂家住宅の寝殿について」において、「第 1 図の 8」として掲載される「二条殿寝殿（明治年間）」について、同論文の註記の 16) に、「二条家拝領地図面明治 宮内庁書陵部蔵」とあるのは、その出典を示すものと考えられる。しかし、図 4 の一部、寝殿一郭を掲載する同論文において、図 4 に関する検証はなく、また「明治年間」とする根拠は明示されない。
- 21) 皇学所、大学校のうち、室名からは、図 5 はとくに皇学所にあてられた際の状況を示すものとも考えられるが（大久保註 19 前掲書参照）、判然とはしない。
- 22) ほかに管見では、『当日早旦寝殿以下敷設之事』（『山城国京都二条家文書』、国文学研究資料館蔵、請求記号 64）が、元治元年（1864）4 月における稲荷社還幸行列に関する一連の文書の一つで、二條家寝殿とその一郭について、「障子上」「侍廊」「中門廊」「車宿代」など、同様の呼称を確認できる。
- 23) 『同志社女子大学 125 年』同志社女子大学、2000 年。
- 24) 註 23 前掲書『同志社女子大学 125 年』の 33 頁に掲載の写真「同志社女学校遠景」。
- 25) イザベラ・バード著、時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行（下）』講談社学術文庫、2008 年、金坂清則「イザベラ・バードと京都」（丸山宏ほか編『みやこの近代』思文閣出版、2008 年）。
- 26) 「銅駝御殿」「閑白御殿」と呼ばれる建物が平安義会の建物として戦前まで用いられ、鳳林寺（大阪市天王寺区六万休町）に昭和 34 年（1959）再建された現本堂は、それを譲り受け移築したものであるという。「銅駝御殿」とは二條家の別称であるから、二條家の今出川邸内の建物と考えられる。『日本歴史地名大系第 28 巻 大阪府の地名』（平凡社、1986 年）の「鳳林寺」の項、中村勝利「寺町を歩く―鳳林寺に移築された二条閑白邸の銅駝御殿―」『大阪春秋』7 巻 2 号、1979 年などを参照。なお、同志社女子大学キャンパス内（今出川校地）において、体育施設建設にともなって、2007 年度に実施された発掘調査（常盤井殿町遺跡）は、図 4 の東半（右半）一帯にあたる地域で、江戸時代二條家屋敷の遺構、二條家家紋瓦などの遺物が検出されている。同調査については、同志社大学歴史資料館の浜中邦弘氏からご教示を得た。また速報として「近世二條家公家屋敷の発掘調査（2007 年度）―常盤井殿町遺跡―」（平成 18 年度～20 年度科学研究費「平安貴族の都市的な居住と住宅の総合分析」（研究代表西山良平）による公開研究会配布資料、2008 年 11 月 9 日開催）を参照。
- 27) 註 1 前掲。
- 28) 筆者は、「建築史からみる婚姻儀礼」（小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、2007 年）において、公家の婚儀会場について考察する中で、近世二條家屋敷の建築について概観することがあり、本稿で取り上げた指図等の一部を紹介している。その拙稿で、『二條家殿堂之図』（国会図書館蔵）を、天明大火後における今出川邸の寝殿一郭を描く指図として掲載し、とくに明治頃の状況を描くものと示唆した。しかしこの点については、描写内容がその後の新知見をもとに明らかにした本稿での検討結果とは整合的ではないため、再考の必要がある。同図伝来の経緯については、図左端に次のように記されるのが参考になる。すなわち、「此図旧保大阪人渡邊花鈴菅原吉賢所蔵明治廿三年有故帰于我有 酔園小澤圭識」と記し、「酔園」の印を捺す。酔園と号する「小澤圭」とは、小澤圭次郎（1842～1932）である。桑名藩医小沢長庵の次男に生まれ、海軍兵学寮、東京師範学校で教員を勤めた小澤は、作庭や庭の改修を行う造園家、日本庭園史の研究者としてもよく知られる。収集した膨大な資料を 70 才の頃、旧帝国図書館に売却していて、現在は国立国会図書館に所蔵される（国立国会図書館百科編集委員会編『国

立国会図書館百科』出版ニュース社、1988 年、小林治人「酔園 小沢圭次郎 伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」」『ランドスケープ研究』58 巻 3 号、1995 年）。本指図もその一つと考えられる。明治 23 年は、雑誌『國華』創刊の翌年であり、小澤は同年 2 月号より明治 38 年 6 月号まで同誌に「園苑源流考」を執筆・掲載している。日本庭園史研究のための資料として収集したのかもしれない。同図が描く寝殿の間取りは 17 世紀前半九條家寝殿によく似ているが、背面の庇に違いがある。また透渡殿と二棟廊を介して接続する寝殿西方の建物について、類似する間取りが管見に見いだせない。同図の詳細な分析は今後の課題としたい。

（2008 年 9 月 7 日原稿受理、2008 年 11 月 13 日採用決定）